書誌から見た昭和時代（戦後）のワイルド受容
―日本ワイルド協会を中心に―

佐々木　隆

プロローグ

ある外国文学者の研究がその国でどの程度盛んなのかを見る一つの目安として、翻訳全集、学会の存在が挙げられよう。学会と名乗る団体もあれば、協会と名乗る団体もある。

ここでは日本ワイルド協会を中心に取り上げたい。オスカー・ワイルドはアイルランド・ダブリン生まれの文学者、劇作家、詩人、ジャーナリストであるが、その活躍がロンドンを中心に展開されたため、当初はイギリス文学史の中で取り上げられた。その後、アイルランド文学という概念が定着してくると、ワイルドはアイルランド文学でも取り上げられるようになった。しかし、アルフレッド・ダグラスとの一件もあったことから、イギリスやアイルランドで再評価されたのは、平成 7 年(1995)2 月にウェストミンスター寺院の詩人コーナー西側の窓のステンドグラスに彼の名前が刻み込まれた以降のことである。イギリスでオスカー・ワイルド協会が創立されたのは平成元年(1989)であるが、日本では昭和 50 年（1975）12 月 6 日に日本ワイルド協会が設立された。ここでは日本ワイルド協会を取り上げたい。

1　日本における学会

英米文学関係における学会では、おそらく最大規模は日本英文学会だろう。しかし、学会の中で個人文学者名が冠に入っている学会は決して多くはない。おもな学会には以下のようなものがある。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
日本ウィリアム・フォークナー協会

日本エズラ・パウンド協会
日本サミュエル・ベケット研究会
日本シェイクスピア協会
日本ジョージ・エリオット協会
日本ジョンソン協会
日本ソール・ベロー協会
日本ナサニエル・ホーソーン協会
日本ナボコフ協会
日本ヘミングウェイ協会
日本マラマッド協会
日本ヴァージニア・ウルフ協会
日本ワイルド協会

日本における学会組織は明治まで遡ることになる。ちなみに日本最初の学術団体としては、明治6年（1873）に森有礼（1847-1883）らによって結成された明六社（めいろくしゃ）があげられる。文芸協会もこうした観点からみれば、学会として位置付けができるかもしれない。また、明治40年（1907）設立のイプセン会はまさに個人名を冠にした学会ということになろうか。座長が柳田國男(1875-1962)、他に正宗白鳥（1879-1962）、岩野泡鳴（1873-1920）、蒲原有明（1875-1952)、小山内薫(1881-1928)等がメンバーであったようだ。[1] しかし、9回開かれた後、『新思潮』廃刊と共に中絶したようだ。

2　日本ワイルド協会

日本ワイルド協会は昭和50年(1975)12月6日に設立を記念して「公開座談会と映画の会」を明治大学大学院研究所講堂で開催した。設立当時のおもな役員は顧問に本間久雄、矢野峰人、平井博。会長に西村孝次。理事に井村君江、小野二郎、川崎淳之助、佐藤喬。幹

事に荒井良雄、三好弘、五島正一郎という構成であった。設立当時の様子については平成7年(1995)12月発行の『ワイルド　ニューズレター』(創立20周年記念号)がよい参考となる。初代会長の西村孝次以後、小倉多加志、井村君江、川崎淳之助、荒井良雄、山田勝、澤井勇、玉井暲、現在は河内恵子が会長を務めている。日本ワイルド協会の活動は秋の大会を中心に、研究会の開催、年1回『オスカー・ワイルド研究』の発刊となっている。平成7年(1995)に創立20周年を迎えた日本ワイルド協会は、設立当時から20年をまとめた『ワイルド　ニューズレター』(創立20周年記念号)を発行、平成9年(1997)には当時の山田勝会長を中心に協会が全面協力した世界初の事典、『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店)も没後100年の記念事業のひとつである。記念事業は没後100年にあたる平成12年(2000)の日本ワイルド協会の活動は、協会としても積極的であるが、各会員がワイルド研究書を意欲的に出版している。また、元会長の澤井勇の実践女子大学図書館には、ワイルドの資料を収集した本間久雄のコレクションがあることも付け加えておきたい。

日本ワイルド協会設立前と以後を比較するために、昭和40年～昭和63年までのワイルド研究書(単行本)の出版状況、ワイルド研究に関する論文の発表の状況について見てみたい。(2) なお、『WILDE NEWSLETTER』掲載の論文は論文としてカウントしていない。

	研究書	論文	備考
昭和40年(1965) ～昭和44年(1969)	0	33	
昭和45年(1970) ～昭和49年(1974)	0	39	
昭和50年(1975) ～昭和54年(1989)	1	69	特集を1でカウント

昭和55年(1980) ～昭和59年(1984)	5	84
昭和60年(1985) ～昭和63年(1988)	0	74

ちなみにイギリスではオスカー・ワイルド協会(The Oscar Wilde Society)が設立されたのは平成元年(1989)のことで、ロンドンのリッチングズ・パークに事務局を置いた。[3] イギリスよりもかなり早く日本でワイルド専門学会が設立されたのはまぎれもない事実である。

ここで日本ワイルド協会発行の学会誌の内容(1976年4月～1988年7月)を紹介しておきたい。[4]

『会報』(第1号) 日本ワイルド協会、1976年4月
ワイルド研究資料展示会と本間久雄博士の特別講演
第1回ワイルド・セミナー　7月3日、4日に八王子セミナー・ハウスで
ワイルド・ニュース
日本ワイルド協会設立記念集会
日本ワイルド協会設立報道
『オスカー・ワイルド全集』刊行開始
サロメ――宗教から芸術へ――
小林ドンゲ展
『がわままな巨人』の放送
『仮面の倫理』の出版
O. Wilde における Shakespeare
日本におけるワイルド書誌
世紀末文学の現在性

日本ワイルド協会役員
『会報』（第２号）日本ワイルド協会、1976 年８月
ワイルド・ニュース
ワイルド資料展と本間久雄博士の講演
ワイルド研究資料目録と日本ワイルド出版目録
第１回ワイルド・セミナー　「サロメをめぐって」　八王子の大学セミナー・ハウスで開催
音楽物語「幸福な王子」
「ユリイカ」のワイルド特集
ワイルドと自然
世紀末英文学と日本
サロメ――ワイルド戯曲創作の背景
ワイルド文学散歩
ワイルド全集着々と刊行中
お知らせ
ワイルド協会創立１周年記念集会
ワイルド研究資料目録残部あり
『ワイルド文学』創刊号原稿募集
ワイルド・ニュースに御協力を！
一般会員の年額会費千円に
日本ワイルド協会会員紹介
『会報』（第３号）日本ワイルド協会、1982 年４月
日本ワイルド協会第７回大会
ワイルド国際セミナー　―５月 29・30 日セミナー・ハウスで―
ワイルド国際セミナー　――「まじめが大切」をめぐって――
プログラム
ロジャー・マンベル博士について
日本ワイルド協会規約

日本ワイルド協会役員

『WILDE NEWSLETTER』(第1号) 日本ワイルド協会、1984年7月

協会誌再発刊にあたって

日本ワイルド協会規約

井村君江，ワイルド研究のおもしろさ

西村孝次，『ワイルド全集』を訳了して

千葉剛，The Happy Princeについて

荒井良雄，『サロメ』を読む

モノローグ＆ダイアローグ

Kei，イギリスからのモノローグ

五十田安希，日本の舞台からのモノローグ

五味田幸夫，結婚式からのモノローグ

日本ワイルド協会編，日本ワイルド協会八年の歩み

日本ワイルド協会会員名簿

編集後記

『WILDE NEWSLETTER』(第2号) 日本ワイルド協会、1985年7月

日本ワイルド協会規約

Lawlor, John, The Unkown Oscar

井村君江，John Lawlor 教授紹介

井村君江，ワイルドの世紀末

荒井良雄，ワイルドと世紀末

川崎淳之助，ユゴーとワイルド—その台詞の質について—

Silva, Arturo, The 90s: Beginning of the 20th Century: An Introduction to Any Further Study of Wilde

荒井良雄，今は亡き三好弘博士へ

堀江珠喜，ワイルドの詩と世紀末都市

五味田幸夫，視線の作法——ワイルドへの誘い

木村克彦，『サロメ』試論

Silva, Austro, Salomé
西村孝次,(書評)堀江珠喜『サロメと世紀末――ワイルドに於ける悪の系譜』、『ワイルドの時代――世紀末風俗雑話――』
Beyond Wilde
山口哲生,仮面の告白、仮面の真実 "The Mask is the Face"
千葉剛,僕のワイルド体験
モノローグ&ダイアローグ
酒井敏,ある疑問
樋口陽子,ガク無き者のモノローグ
岩崎光洋,試写室からのモノローグ
ワイルド書誌 1982 April～1985 June
編集後記
『WILDE NEWSLETTER』(第3号)日本ワイルド協会、1986年7月
井村君江,日本ワイルド協会十周年に当って
川崎淳之助,ワイルド協会十周年を迎えて――これからのことなど――
吉田正俊,不真面目も大切――乱調の旗手ワイルド
関川左木夫,ワイルドから朔太郎に流れる怪奇の線―ビアズレイと夢二がつなぐ―
内山正平,ワイルドと宗教
玉井暲,『獄中記』と『レディング監獄の唄』における「語り」
大曲陽子,Oscar Wilde 頽廃の美学―『ドリアン・グレイの肖像』を中心に―
井村君江,最後の歳月の意味
西村孝次,最後の歳月―ワイルド晩夏―
酒井敏,その「罪と罰」
堀江珠喜,翻訳活動について
井村君江,The Importance of Playing Oscar

渡辺幸俊，嘘の効用
島川聖一郎，嘘の効用
河内恵子，ロンドンからの手紙
モノローグ＆ダイアローグ
　村上昌美，ワイルドは生きている
　梅津義宣，みちのくの春によせて—わが邂逅
　深澤清，出会い
麓常夫，ワイルド書誌
編集後記

『WILDE NEWSLETTER』（第４号）日本ワイルド協会、1987 年７月
井村君江，二つの世紀末
前川祐一，マックス・ビアボウム　『過去を覗く』のワイルドについて
西村孝次，ダグラスという男
井村君江，The Importance of Being Constance
堀江珠喜，ワイルドとジイド
堀江珠喜，ワイルドの時代とシャーロック・ホームズ
梅津義宣，Oscar Wilde の風習喜劇の言葉—喜劇性構築のレトリック—
麓常夫，ワイルド書誌
土橋初枝，『ウインダミア夫人の扇』について—扇の劇的効果を中心に—
編集後記

『WILDE NEWSLETTER』（第５号）日本ワイルド協会、1988 年７月
西村孝次，最高のレクイエム
富士川義之，芸術家としての批評家—ペイターからワイルドへ
澤井勇，観て想う—ラスキン、ペイターからワイルドへ—
佐藤喬，ワイルドとモーム

佐藤真二，Pleasure が大切―『真面目が大切』試論
岩永弘人，ワイルドの初期の詩について―‘Theoretikos’を手がかりに
都築佑吉，ラスキン、ペイター、ワイルド
玉井暲，ワイルドの＜純粋･自立＞文学観―ラスキンとペイターのあいだで
井村君江，Ruskinism Oscarised
木村克彦，ワイルド書誌
協会・会員消息
編集後記

3　現在の役員

日本ワイルド協会の大会の最新の大会は平成 20 年 12 月に駒澤大学で行われた。現在ホームページでも公開されているが、分かる範囲で紹介しておきたい。

日本ワイルド協会　役員（2008 年 12 月現在 50 音順）

1．会　長：　河内恵子（慶應義塾大学教授）
2．副会長：　貝嶋崇（比治山大学教授）
　　原田範行（杏林大学教授）
3．理　事：　阿佐美敦子（実践女子大学専任講師）
　　岩永弘人（東京農業大学教授）
　　貝嶋崇
　　金田仁秀（広島女学院大学准教授）
　　河内恵子
　　坂本光（事務局長、慶應義塾大学准教授）
　　佐々井啓（日本女子大学教授）

新谷好（追手門学院大学教授）
鈴木英明（山脇学園短期大学准教授）
玉井暲（大阪大学教授）
角田信恵（岐阜聖徳学園大学教授）
原田範行

4．名誉会長：　川崎淳之助（元ワイルド協会会長、元立教大学教授）

5．顧　問：　井村君江（元日本ワイルド協会会長、元明星大学教授）
澤井勇（元日本ワイルド協会会長、実践女子大学教授）
西垣千明（元玉川大学教授）
富士川義之（駒沢大学教授）

6．事務局長：　坂本光

7．書　記：　岩永弘人
鈴木英明

8．会　計：　阿佐美敦子

9．会計監査：　岩永祥恵（駒澤大学講師）
逢見明久（駒澤大学准教授）

10.『ワイルド研究』編集委員：
玉井暲【編集委員長】
池田祐子（福岡大学専任講師）
浦部尚志（青山学院大学講師）
貝嶋崇
金田仁秀
坂本光
原田範行

11. 日本ワイルド協会ウェブ：サイト担当：　坂本光

（『オスカー・ワイルド研究』第 10 号、2009 年 3 月より）

エピローグ

日本ワイルド協会は平成 9 年(1997)10 月に当時の会長を中心に『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店）を出版した。世界初のワイルド専門事典が日本で出版されたのだ。昭和 50 年(1975)に設立された日本ワイルド協会が日本のワイルド研究を支えて来たこともさることながら、若手の研究者を育てた功績はさらに大きいと言わなければならない。

注

(1) 戸板康二「イプセン会」（『悲劇喜劇』早川書房、1978 年 3 月号）、p. 38.／秋田雨雀・戸板康二「第 1 回対談日本新劇史」（『新劇』第 5 巻第 11 号、1958 年 9 月），pp. 60-63

(2) 佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌』（イーコン、2009 年 2 月）より

(3) 山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店、1997 年 10 月）、p. 573.

(4) 佐々木隆編『日本ワイルド研究書誌』（イーコン、2009 年 2 月）より